"もっと面白くなるかもしれない。"

中ハシ克シゲ

撮影　福永一夫

2016 **6.4(土)–6.22(水)**

木金休廊 / **14:00 - 20:00**
水曜 - **18:00** / 入場無料

SUNABA GALLERY

"もっと面白くなるかもしれない。"

中ハシ克シゲ

「彫刻について――中ハシ克シゲの新作」

ちょうど両手で持てるほどの粘土の塊。ぐいと押し、ねじり、時に引き伸ばされ千切られ、穴をうがたれている。作者が粘土とさまざまに格闘した様子が、ありありと見える。そしておそらくは、えいや、と一気呵成になされたであろうことも見てとれる。「何だ、それだけ!?」と言われれば、それだけ、かもしれない。予めの意図的な造形ではなく、最小限の介入から見出されたかたち。しかしこの小さな塊の、彫刻について何と多くを語っていることだろう!

タッチの、面の連なりによる動勢。わずかにカーブした先端がはらむ空間の広がり。量感の圧縮そして解放。表面のデリケートなしわに刻まれた遠い時間の感覚は、フレッシュな断面との対比で一層に際立つ。要素が限られるだけに、ひとつひとつが、強くはっきりと放たれて届く。さらには、床の間にうってつけのサイズ感。明治のはじめ置物から美術へと格上げされてしまった日本の彫刻の宿命を映すかのようだ。そしてこのサイズ感ゆえに、掌中の石ころに山河を見るような心持ちにもなる。造形的意識という点ではすれすれのエッジに立ちあがる粘土像は、個人の意志を越えた大きな世界ともつながっている……などと知ったふうな弁を弄するのは、だが、でんと眼前に鎮座する粘土の塊には、滑稽なほどに似合わない。やや情けなくもあっけらかんと大らかに、ただそこにある塊の前では、もう、からからと笑うほかないだろう。

今回の新作は、これまでの中ハシ克シゲを知る人にとっては、一見、衝撃的なまでに意外な展開でもあろう。1990年代初頭にとりわけ注目を集めた、塀に松といった日本的モチーフのポップでキッチュな金属彫刻。あるいは2000年以降のほぼ10年が費やされた、ゼロ戦を出発点に太平洋戦争の記憶を問う「ゼロプロジェクト」。ねずみ色の粘土像とは対照的なこれらアイコン的モチーフによって、しかし中ハシはつねに、この時代この国に生きる私たちにとっての彫刻というものを問い続けてきたことこそ、あらためて思い起こしたい。たとえば「ゼロプロジェクト」で作られる実物大の戦闘機。原型となるのはプラモデルだ。ミリ単位で接写し、実寸へ拡大した1万2万もの写真をひたすらにテープで貼り合わせ、表面をなぞって出来るのは、ふにゃふにゃと自立しないハリボテ彫刻で、堂々たる彫刻芸術のモニュメント性は文字通り骨抜きにされている(しかも最後には燃やされて土に返るのだ)。

彫刻って何だ、芸術って何だ。今回は、自身の原点でもある塑像に立ち帰っての直球勝負である。心身一体の動きと粘土が出会って生まれる塑像は、作者が「一人合評」と呼ぶチェックを何度も経て、合格したものだけが残されてゆくという。繰り返し見つめ見返し、いわば彫刻が成る地点を見極めるこの試みから、ひょっとして、すでにそこにあったのだけれど、私たちが私たちの「彫刻」とは気づいていなかった何かが見えてくるのかもしれない。勿論それはかんたんなことではなく、だからこそ「もっと面白くなるかもしれない」という予感に溢れている。この希有な実践の行く方を見逃さぬよう、見る側も心身の感度を最高に研ぎ澄まして臨みたい。

江上ゆか(兵庫県立美術館)

2016 **6.4(土)–6.22(水)**

〒556-0005 大阪市浪速区日本橋4−17−15
地下鉄「恵美須町」徒歩10分
080-6145-7977 sunabagallery@gmail.com

木金休廊 /**14:00 20:00**
水曜 -**18:00** / 入場無料

SUNABA GALLERY

このQRコードを読み取ると
わかりやすい道順が表示されます。